

第32回地域医療現地研究会に参加して 「晴れの国岡山から明るい地域医療の未来を考える！」

—千年の歴史を持つ備前焼発祥の地で、多職種連携を深める—

<岡山県・備前市>



国診協地域医療・学術委員会前委員長／山形県・小国町立病院長

阿部吉弘

はじめに

平成30年5月18日（金）、19日（土）の2日間にわたり、岡山県において国診協、国保中央会、岡山県国民健康保険診療施設運営協議会、岡山県国民健康保険団体連合会の主催による第32回地域医療現地研究会が「晴れの国岡山から明るい地域医療の未来を考える！—千年の歴史を持つ備前焼発祥の地で、多職種連携を深める—」をメインテーマとして開催された。

第1日目は全国各地の国保直診関係者、そして地元岡山県の国保直診関係者合わせて242名の参加者が岡山市の岡山県医師会館三木記念ホール（写真1）に集合し、開講式を行った後、3班に分かれて備前市にバスで移動、3つの病院および老人保健施設の4か所と備前市立備前焼ミュージアム、特別史跡である旧閑谷学校の視察後に岡山市に戻り、地域医療交流会で懇親を深めた。翌日にはシンポジウム形式による全体討議を行った後、開講式が行われ全日程を終了した。

研修1日目 - 5月18日（金）

〔開講式〕

午前10時より開講式（写真2）が行われ、はじめに押淵会長（写真3）が挨拶に立ち、超高齢社会を支える自助、互助、共助、公助の仕組みに国診協が取り組んできた地域包括医療ケアが大きく関与していること



写真1 岡山県医師会館三木記念ホール



写真2 開講式

を強調され、さらに、総合診療専門医が地域包括医療ケアを支える中心的役割を担っていく医師像となることが期待されていると挨拶された。続いて前回の福井県に次ぎ2度目の参加となった国保中央会の原勝則理事長（写真4）からは、地域包括ケアシステムのオリジナルは国診協の地域包括医療・ケアであり、多くの



写真3 開会挨拶を行う押淵国診協会長



写真4 開会挨拶を行う原国保中央会理事長



写真5 歓迎挨拶を行う田原備前市長

町村が国保直診との連携強化を図っており、国保直診が市町村から頼られる存在となることへの期待が述べられた。

続いて備前市の田原隆雄市長（写真5）から歓迎の挨拶があった。また、岡山県の伊原木隆太知事（代読の保健福祉部医療推進課の斎藤雅史氏・写真6）からの来賓のあいさつがあった。最後に第32回地域医療現



写真6 来賓挨拶を行う伊原木岡山県知事（代読の保健福祉部医療推進課の斎藤氏）



写真7 オリエンテーションを行う荻野健次氏（第32回地域医療現地研究会会長）

地研究会の荻野健次会長（備前市病院事業管理者・写真7）からのオリエンテーションが行われた。その中では岡山県内の国保直診は全施設が中山間地に位置していること、以前は16あった国保病院が10病院に減少したこと、そして、これから視察する備前市についての説明があった。

備前市は岡山県の南東部に位置し、1市2町（備前市、日生町、吉永町）の合併で新市となったが、合併前の備前病院、日生病院、吉永病院の3病院がそれぞれの地域で独自の活動を継続していることが紹介された。その後3班に分かれて岡山市から備前市に向けてバスで移動し、施設見学に移った。

【施設視察研修】

○備前市立備前焼ミュージアム

岡山市から約1時間で備前市に到着し、備前焼ミュ



写真8 備前焼伝統産業会館



写真10 備前病院



写真9 備前焼ミュージアム



写真11 備前病院入り口の備前焼のレリーフ



写真12 備前病院見学

ミュージアムに隣接する備前焼伝統産業会館（写真8）で昼食をとった。弁当についた備前焼の箸置を記念にいただいた。箸置としては使っていないが、自宅の調度の一つとして飾ってある。備前焼は日本遺産に認定されており、一つとして同じものがない模様が特徴とのことであった。備前焼ミュージアム（写真9）は1階から4階までの展示室があり、人間国宝に認定された人の作品から新進気鋭の作家の作品が展示されていた。焼き物への素養などない筆者であるが、作品の多くが素朴で落ち着きがあり、多忙な時に備前焼の茶碗でお茶を一服もいいかなと思茶碗を購入し、毎日使っている。

○備前市国保市立備前病院

備前病院（写真10）は備前焼の地元である伊部地区^{いんべ}

にある病院で、病院入り口には備前焼のレリーフ（写真11）がある。制作期間約1年を要したという力作である。病院は平成24年に新築され、一般病床46床、医療療養型病床22床、地域包括ケア病床22床の病床数90床の病院である（写真12）。救急医療の提供、高度医療機器を設置した地域の中核的病院をめざしながら、リハビリの充実、透析、介護保険事業を展開して地域包括ケ



写真13 老健設備前さつき苑



写真14 老健設備前さつき苑で説明を受ける

アの一翼を担っている。また、職員のライフワークバランスを考慮した院内保育所「たんぽぽ」を開設している。この施設は備前病院のみならず、備前市の病院事業施設に勤務する職員の利用が可能とのことであった。

○老人保健施設「備前さつき苑」

備前病院に併設された入所定員80人、通所定員30人の老健施設である。病院とは渡り廊下でつながっており、医療スタッフとの連携が密にとれるメリットがある。近年在宅復帰の難しい利用者が多くなっているとのことで、筆者の病院の併設老健施設も同様で、同じ課題がここにもあった(写真13、14)。

○備前市国保市立吉永病院(写真15)

本研修会の荻野会長が以前院長をしていた病院で、



写真15 吉永病院



写真16 吉永病院の概要説明を行う荻野健次氏

荻野先生が自ら説明にあられた(写真16)。病床は50床(うち地域包括病床8床)である。院内にはデイケアセンターがあり、大きな総合病院のように数多くの診療科があるのには驚いた。これは近くに山陽自動車道の備前インターチェンジや山陽本線のJR吉永駅(岡山や兵庫県相生へ直通)があつて交通の便に恵まれており、岡山市内からの医師の派遣が受けやすいとのことであった。

病院は平成18年に新築され、1階フロアは荻野先生の間接照明へのこだわりにより落ち着いた雰囲気醸し出されていた。外来診察室は診療科の明示がなく「1診」「8診」との表示が診察室前にあるのみである(写真17)。総合的に診療するとの意図があるとのことであった。荻野先生使用の診察室は荻野先生の音声入力によるカルテ記録が可能とのことであった(写真18)。病棟の多床室は各ベッドサイドに窓がある工夫がなされていた。



写真17 1～8診の廊下



写真19 国宝の旧閑谷学校講堂

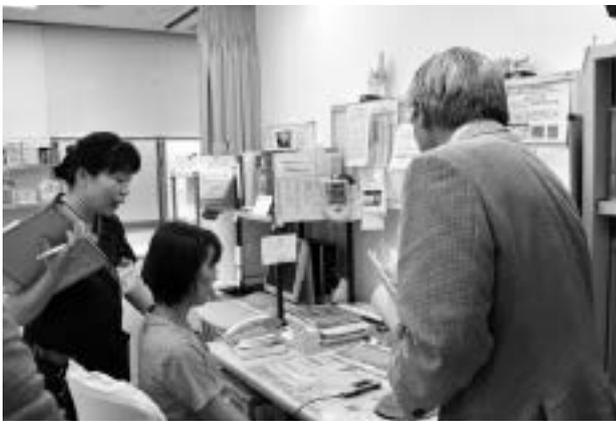


写真18 荻野先生使用の診察室



写真20 旧閑谷学校回廊から見た「克明德」の三字額

○旧閑谷学校

1670年に岡山藩主池田光政が創建した日本初の「庶民のための学校」である。特別史跡でもあり、講堂(写真19)は国宝であるが回廊部分は立ち入ることができる。回廊から中を見ると「克明德」の三字額が目に入った(写真20)。説明には「克」は力を尽くして事を成し遂げる、「明」は物を正しくみる力、「徳」は善や正義をわきまえる高潔な品性と解釈すれば、人づくりの基本を簡潔に言い表しているとあった。なるほどと一人納得し写真に収めた。孔子廟の入り口には2本の楷の木があり(写真21)、秋には紅葉が見事とのことである。

○備前市国保市立日生病院(写真22)

日生病院は平成18年に現在地に新築移転した。海が目の前にあり、日生諸島最大の鹿久居島をすぐそばに見る風光明媚な地に立地している(写真23)。病院は



写真21 孔子廟入り口にある2本の楷の木

一般病床40床、療養病床52床の計92床を持つ。最初に案内されたのは2階のテラスに設置された「リハビリ庭園」であった(写真24)。海のある風景の中でリハビリテーションが行える環境など望むべくもない筆者の病院環境との違いを思うと、風景等の環境も重要であるという想いを新たにしたい。病棟からも海の青、そして山の緑が目に入る環境は素晴らしいものである。この



写真22 日生病院



写真25 交流会の開会挨拶を行う近藤高梁市長



写真23 海が目の前に広がる



写真26 歓迎挨拶を行う山崎鏡野町長



写真24 日生病院2階テラス



写真27 来賓の挨拶を行う鳥井厚労省保険局国保課長

ような環境で慢性期を担うリハビリテーション設備が充実しており、地域住民に信頼されている病院である。

[地域医療交流会]

視察研修後再びバスで岡山市へ戻り、ホテルグランヴィア岡山で地域医療交流会が開かれた。岡山県国民健康保険団体連合会理事長で、岡山県高梁市長である

近藤隆則氏(写真25)の開会の挨拶、次いで岡山県国民健康保険診療施設運営委員会会長で、岡山県鏡野町長である山崎親男氏(写真26)の歓迎の挨拶、来賓の厚生労働省保険局国民健康保険課長である鳥井陽一氏(写真27)より挨拶をいただき、その後全員で備前焼のお猪口を手に、岡山県国民健康保険診療施設運営協議会代表で、岡山県矢掛町国民健康保険病院事業管理



写真28 乾杯の挨拶を行う名部矢掛町病院事業管理者



写真31 交流会のアトラクション「岡山うらじゃ連」



写真29 交流会



写真32 第58回国保地域医療学会（徳島）をアピール



写真30 交流会のアトラクション「日生甚九郎太鼓保存会」の太鼓演奏



写真33 閉会の挨拶を行う西林鏡野町国保病院長

者である名部誠氏（写真28）の乾杯で交流会はスタートした（写真29）。

使用した備前焼のお猪口は持ち帰ることができ、よい記念となった。瀬戸内の味を堪能しつつ懇談する風景があちらこちらに見え、懇親を深めることができた。途中で日生甚九郎太鼓保存会（写真30）、岡山うらじ

や連のアトラクションが披露された（写真31）。また、第58回国保地域医療学会（徳島）について、学会長の沖津修つぎ町病院事業管理者および副学会長が開催アピールを行った（写真32）。終わりに岡山県国民健康保険診療施設協議会医科部会長で、岡山県鏡野町国民健康保険病院長である西林尚祐氏（写真33）の閉会の挨拶でお開きとなった。



写真34 全体討議の座長および助言者



写真35 全体討議の発表者

研修2日目 - 5月19日(土)

[全体討議] (写真34、35)

全体討議は「晴れの国岡山から明るい地域医療の未来を考える！ 一千年の歴史を持つ備前焼発祥の地で、多職種連携を深める」をテーマとして、岡山県国民健康保険診療施設協議会医科部会長の西林尚祐氏(写真36)を座長として行われた。

最初の発表者は、岡山県矢掛町病院事業管理者である名部誠氏(写真37)が「地域包括ケアシステム構築をめざして 矢掛町国民健康保険病院の試みと役割(住民が住み慣れた町で安心して療養できるように)」をテーマに発表を行った。

矢掛町は岡山県南西部に位置し、人口14,700人で年々人口は減少し、高齢化は年々上昇している。この状況下で生活面も含めて総合的に地域全体で支えていく医療が必要で、地域包括ケアシステム構築が急務であることを強調された。そのためには情報の共有化、住民の安心を担保する24時間の医療や介護体制、地域の医療機関、介護施設との連携、病院の医療機能の向上などに取り組んでいる。

病院としては地域医療連携室を中心に、患者さんのニーズに的確に対応して他医療機関への紹介、他医療機関からの逆紹介に対応する機能(患者さんを旅行者にたとえた時のハブ空港的なハブ機能)の充実をめざし取り組んでいることを紹介し、また、地域のクリニックの医師が一時的に病院の臨時職員として病院の機器を利用し、



写真36 座長を務めた西林鏡野町国保病院長



写真37 発表を行う名部矢掛町病院事業管理者

診療ができるオープンクリニックに取り組んでいることを発表した。多職種が精力的に連携して地域包括医療ケアの実践がなされている姿が印象的であった。

美作市立大原病院長の塩路康信氏(写真38)は「話し合い、耳を傾け、承認し」というテーマで話をされた。根性論の話になるとの前置きで話が始まった。先生の長い経験から出た非常に説得力のある話であっ



写真38 発表を行う塩路美作市立大原病院長



写真40 発表を行う榮備前市保健福祉部介護福祉課係長



写真39 発表を行う澤田岡山県国保診療施設協議会歯科部会長

た。「リーダーシップとは上に立つことではなく、人の役に立つことである」との言葉は心に残った。

人のためとは患者のためだけではなく、医療に携わる多職種も入る。連携する多職種と同じ方向を向いて働くことができれば心強いはずで、連携の要となることである。さらに発想の柔軟性を強調された。多くの医療者はマンパワーの不足などから忙しく、ひょっとすると理解者のいないことを嘆き、自分は少数派であるという考えになりがちであろう。連携を行う他の職種もこのような状況に置かれている可能性がある。このように少数派とと思っている連携すべき仲間の輪が広がると、ひょっとすると多数派に変わっていくかもしれないと言われた。

こんな経過が連携を推し進めることになるのではないかと思えた。最後に先生は、地域医療に必要なのはホームランバッターではなく、ヒット、バント

でいつもコツコツ満塁にできるような人材、と述べ発表を終えた。

3番目の発表の岡山県国民健康保険診療施設協議会歯科部会長の澤田弘一氏(写真39)は、最初に岡山県内の5か所の歯科診療所の現況を述べた。各診療所とも地域包括ケアシステムを意識した診療活動が行われていることが示された。次いで、岡山県の歯科診療所が取り組んでいることとしての口腔ケア、食支援について述べ、特に食支援については、入歯の不調→食欲低下による栄養摂取量の低下→筋力低下による活動量の低下→閉じこもりなどの社会性の低下→生活機能低下→要介護状態というサイクルを最初の段階で断ち切る食支援の重要性と多職種連携の重要性が示された。

発表の最後は「備前市の医療・介護・福祉連携の取り組み」をテーマに、備前市保健福祉部介護福祉課の榮研二氏(写真40)であった。開業医の発案によって始まった現場の多職種が集まり課題を話し合う顔の見える連携会、医療・介護・福祉・行政などの代表者が集い、連携のあり方を協議する備前市在宅医療・介護連携推進協議会、住民も参加する市民公開シンポジウムが紹介された。また、連携ツールとしてiPadを用いた「ケアキャビネット」や個人の医療情報などを各自がカプセルに入れて保管する「在宅安心カプセル」の紹介もあった。備前市の基本的な保健医療システム構築のための課題抽出に、国保データベース(KDB)が利用されていることが紹介された。

4人の発表の後、フロアとのディスカッションでは、



写真41 助言を行う鳥井厚労省保険局国保課長



写真43 次期開催地挨拶を行う靱井国診協副会長



写真42 助言を行う金丸国診協副会長



写真44 閉会の挨拶を行う福山国診協副会長

看取りを含む自宅での医療の課題、オープンクリニックへの質問があった。また、本研修会の荻野会長からは、備前市の人口が減少していく現状のなかの3つの病院の今後を含めての行政との連携が重要になるとのコメントがあった。最後に助言者からの助言があった。厚生労働省保険局国民健康保険課長である鳥井陽一氏(写真41)からは、連携ということが言われ始めて久しいが、医療・介護連携の形が整ってきている。最近ではデータの加工技術が進歩してきており、データ利用がますます重要となるであろうとの助言をいただいた。金丸国診協副会長(写真42)からは各発表者の優れた視点を高く評価する発言があり、連携の鍵として「人の役に立つ」、行政と連携していくことの重要性を強調された。

[閉講式]

第33回地域医療現地研究会実行委員長の靱井国診協

副会長(写真43)より、第33回地域医療現地研究会は2019年5月17・18日に「豊の国おおいたで人口減少社会に立ち向かう地域づくりを考える～仏の里とジオパークの島からオンリーワンの地域包括ケアを発信!～」をメインテーマに大分県国東市と姫島村で開催される。次いで福山国診協副会長(写真44)より地元関係者への謝辞と閉会の挨拶があり、2日間にわたり行われた第32回地域医療現地研究会が終了した。

おわりに

研究会が終了して2か月後に発生した西日本の豪雨災害で岡山県も甚大な被害を受けられ、誌上をお借りして心よりお見舞いを申し上げます。一日も早い復興をお祈りいたします。

※出演者等の役職は開催当時のものです。